

巻頭言
Greeting

×

津村 俊夫
Toshio Tsumura
聖書宣教会
研究図書主任・図書館長

Profile

1944年生まれ。1974年から聖書神学
舎教師。旧約学。聖書解釈学。図書館
長。15年間筑波大学教官。新日本聖書
刊行会、翻訳編集委員長。



聖書信仰と聖書翻訳

2003年1月に、私が舟喜順一先生の後を受けて、新改訳聖書刊行会の理事長に就任することになってしまったとき、私は先生からアドバイスを得たいと思いお電話しました。「先生、これから、一体どうすれば良いのでしょうか」とお尋ねしたときに、先生は一言、「聖書信仰を大事にしてってください」と仰っただけでした。人との関係を大事にしないとか、組織を守っていきなさいとか仰いませんでした。それ以後、先生はそれまでの重責のゆえに心身を損ない休養されました。その後も、先生から直接アドバイスのことばは聞くことが出来ませんでした。しかし、その数ヶ月前から、先生は将来のことを案じてでしょう、私たち若い者（とは言え、60代の後輩理事達）に、毎週のように分厚い資料集を、先生自らコピーをして5部ほど用意し、ひとりひとりにこれを読むようにと手渡されました。それは、後で詳しく知ることになる、著作権確認訴訟の記録や理事会資料でした。ご自分のいのちを削るようにして、新改訳聖書が日本の教会の共有財産になるべく努力された先生にとって、「聖書信仰」こそが最大の関心事であられたのです。

先生の「聖書信仰」は、あらゆる事柄においてみことばに徹底して従うことであったと思います。聖書信仰が単なるスローガンではなかったことを、宣教会で、また浜田山教会で先生と親しく、しばしば時間を超越して、お

交わりをいただいていたから、その一言の意味することがなんであるのかがよく分かりました。あの一言が、その後の私の聖書翻訳への関わり方に対して、励ましとなり支えとなっています。

この度、私は、編集委員長としての立場上、31166節ある聖書に一節一節目を通し、編集が終わってからも、少なくとも全ての節を三回は「読んだ」ことになります。特に課題のあった箇所は、繰り返し繰り返し検討しました。この経験を通して、私は、自分の聖書に対する向き合い方を改めて問われたような気がしました。聖書そのものから、「その全体」から、主のみこころを確認することの大切さを、先生自ら、聖書翻訳を通して教えられたことを生前語っておられました。「聖書信仰」とは、自らが聖書の全体から教えられ、その教えられたことに従って生きることであると、先生は、その生涯を通して私たち後輩に教えてくださいました。この度出版にまで導かれた『聖書 新改訳2017』が、日本語で聖書を読むすべての人にとって、神の素晴らしい救いを生きるために用いられることを願ってやみません。

No.171 Topics

- p03 秋の行事から - リトリート -
- p04、05 教会奉仕のあかし、奉仕教会の声
- p06 短期留学の恵み
- p07 学びの窓

赤坂 泉

Izumi Akasaka

聖書宣教会 主任牧師・校長

「恵みを数えて」

これは10月のリトリートのテーマでした。一同、年度前半を振り返り、また人生を振り返って主の恵みを数え、それを分かち合う幸いな機会を得ました。学舎としても主の恵みを覚えて、改めて、今日までの歩みと今年度の体制を導いてくださった主に感謝と賛美をおささげします。また、諸教会の皆様のお祈りとお支えに心からの感謝を申し上げます。

研修生27名は、学びの結実を整理し、収穫する大切な季節を過ごしています。もっとも、皆様がこれをお読みくださるのは、学びの後期も折り返しの頃となりますが、主の恵みに支えられて精一杯歩んでいるはずです。今年度の卒業予定者は5名です。聖書神学舎での3年ないし4年の課程を修了して、整えられた姿で遣わされて行くことを主に祈っています。完成した姿で、というのではありません。誰しも、奉仕の現場でさらに練り整えられて、主に用いていただくのですから。

教職員一同も、恵みに支えられています。新改訳2017に関わる奉仕で多忙を極めていた教職員たちも刊行まで無事に守られ、主に感謝しています。

秋の行事など

10月7日には、聖書宣教会オルガン協力会主催のパイプオルガン演奏会が開かれました。40回記念ということで5人の卒業生が演奏者として奉仕なさり、地域社会からの出席もあり、演奏会は100名を越える盛況でした。

11月は、4日がオープン・デイでした。授業と学舎を公開して、交わりの機会としており、入会の可能性を祈りつつの来会者たちもあり、これも盛

況でした。みこころが実現しますように。続く15日の祈りの日の説教者は岸本理事長です。25日には、宗教改革500年を覚え、改めて福音を見つめて、賛美礼拝をささげます。そのあとは、ほどなくアドベントになり、教会暦の新たな一巡りが始まることになります。

新年度に向けて

学舎の2018年度に向けての備えも一歩ずつ進んでいます。要覧が発行され、入会願書の受付が始まっています。混乱の増すこの時代に、主のしもべとして仕える者たちを、主ご自身が立ち上げらせ、踏み出させてくださることを期待しています。そして、聖書神学舎にも、主の選びの器たちが教会から送り出されてくることを待っています。

「教会のわざ」

神学教育は、教会のわざです。聖書神学舎において、具体的に祈り、支えてくださる多くの教会を通して主の教会のわざがなされています。また、研修生の教会奉仕における訓練を引き受けてくださる諸教会とともに、献身者の教育と訓練を行っています。続く記事にその様子を垣間見ていただきたいと思います。皆様のさらなるお祈りをよくお願いします。

私たちも、主の教会のために、同窓生諸兄姉、各地の教会、世界の働き人たち、この世界のためにいつも祈っております。読者の皆様の上に、恵みが豊かにございますように。またもう一名の専任教師が与えられるように、お祈りくださいますようお願いします。



Re-Treat 恵みを数えて

しゃらい
湯本 赦頼
聖書神学舎本科3年

今回のリトリートのテーマは、「Re-Treat 恵みを数えて」。半年間の学びを終えた節目の時、今日まで注がれ続けてきた恵みを数え、主に心からの感謝をお捧げしたい。そして、主が与えてくださっている同労の友と恵みを分かち合い、祈り合って、共に新たな半年間へと踏み出してゆきたい。そんな願いと祈りのうちに、学びを重視する近年の傾向からは一風変わった企画が備えられました。

まずは開会礼拝。賛美と祈り、交読詩篇、証し、赤坂師の説教に至るまで、一貫して主の恵みが誉め称えられ、説き明かされました。レクリエーションとBBQで交わりを深めた後は、個々人で静まり、みことばと恵みを思い巡らす時を持ちました。

一人一人が受け取った恵みをグループごとに分かち合った後は、今回の目玉(!?)、「スキット作成」に着手しました。分かち合いの中で語られたエピソードやテーマを元に、各グループが脚本から演出まで、協力し合って取り組むのです。成功如何は参加者一同に「丸投げ」の思い切った企画でしたが、兄弟姉妹そして先生方の賜物が遺憾なく用いられ、練習から本番に至るまで、笑いと新たな発見に満ちた楽しいひと時となりました。

最後は一同が円になって座り、一言ずつ、受けた恵みを証し合いました。同じ主を仰いで共に恵みを数える幸いを満喫した一泊二日となりました。栄光在主！

リトリートに参加して

丸毛 雄
聖書神学舎本科2年

この前の週までテスト、レポート、教会奉仕と充実しつつも忙しい日々を送っていましたので、この修養会は、「ゆっくり」とみことばを思い巡らし、ここに至るまでの主のお取り扱いを振り返る恵みの時でした。

仲間たちや先生方と語り合ったり、遊んだり、スキット練習をすることで心身ともにリフレッシュできました。普段とは一味違う交わりを満喫できました。スキットについては、各グループに分かれて「〇〇兄弟物語」や小さな子どもたちも参加した劇など、それぞれユーモアに溢れた出し物でした。しかし、笑いだけではなく、これまで受けてきたそれぞれの「恵み」を覚えてのスキットです。主の導きと感動を覚えるミニ劇場でもありました。

私個人も多くの恵みを受けましたが、特に三原兄の証しと赤坂先生の説教は格別でした。みことばから、高ぶらないこと、主に感謝すること、いつも喜ぶことなどが語られました。これらのメッセージから、自分の高慢を直視させられました。忙しさを盾に、感謝することや謙遜になることから逃げていたのではないかと気付かされました。それゆえ、この集会を通して悔い改めと主への感謝、献身を新たにすることができました。大きな恵みです。

リトリートで受けた数々の恵みを忘れずに、喜んで主に仕えていきたいと願われました。



主に拠り頼む教会奉仕

野村 啓祐

聖書神学舎本科3年

聖書宣教会に入会して2年半が経ちました。振り返ってみるとこの期間中に、献身生活において決定しなければならないことが多々ありました。その中の一つが奉仕教会の決定です。どこの教会で礼拝を守り、奉仕神学生として訓練を受けるのか。それは自分たちの意思によって決定されるのではなく、主の導きに従って決定されていきます。今年度、主は私と私の家族を横浜市緑区にある十日市場めぐみキリスト教会に導いてくださいました。この主の導きを心から感謝いたします。奉仕神学生という立場は、その教会に突如現れて入り込み、期限が過ぎるといなくなる、という特異な存在です。そのような者を受け入れてくださる教会にも心から感謝いたします。

たとえ自分が特異な存在であったとしても、導いてくださった主に信頼し、その教会に仕え、教会と共に自分も成長したいと願っています。そのためには、その教会のことをよく知る必要があります。つまり、その教会の歴史の中に自分も入っていかなければなりません。十日市場めぐみキリスト教会は今年で設立5年目の開拓教会です。まだ5年の道のりであったとしても、そこに

は実に深い歴史が存在しています。この歴史を歩んできた教会の皆様と同じように、私も熱心に礼拝を捧げ、主に拠り頼み、一致して宣教活動をしていく必要があると教えられています。このようにして自分も教会の歴史に入り込んだ上で、与えられた奉仕を全うしていくことが大切です。

十日市場めぐみキリスト教会では、礼拝司会、奏楽、説教など、礼拝に関わる奉仕をさせていただいています。私はこれら奉仕をする中で、恐れを抱くことがあります。主の前に良い礼拝を捧げたいと願えば願うほど、「自分のような者にできるのだろうか」と思うのです。しかしそんな時こそ、「私をこの教会に導き、奉仕を与えてくださったのは主である」ことを思い出します。それは自分の意思で決定されたことではありませんでした。主権は主にあるのです。だから、奉仕に関しても、主が力を与えてくださるのだと信じることが出来ます。また、教会の歴史で大切にされてきた「主に拠り頼む姿勢」が私のその信仰を励ましてくれています。ここでも私は、主と教会に心から感謝いたします。

私は奉仕をすることによって、主が力を与えてくださることを信じる信仰が日々試されているのです。これこそ私に必要な訓練であると実感しています。これからも信仰が与えられ続けるよう真剣に祈り、奉仕に励み、教会と共に成長していきたいと願います。

奉仕神学生を迎えることは、言うまでもありませんが、受け入れ教会にとっては大変大きな恵みです。神学生が教会の働きを助けてくれるのはもちろんのことですが、それ以上に、少し語弊があるかもしれませんが、彼らの純粋でフレッシュな主への献身の思いは、牧師である私も含め良い霊的な刺激となります。特に信徒にとっては、ついこの間まで同じ信徒の立場だった者がすべてを献げて主に仕える姿を目の当たりにすることでとても励まされるようです。

一方で奉仕神学生にとっては、信徒として教会に仕えていたところから献身者として教会に仕えるという意識の転換期でもあります。いつも感じることはありませんが、最終学年に入ると違うスイッチが入るようで、教会の方々も良い意味で一目置いて接するようになっていきます。奉仕教会としては、神学生に教会のあらゆる面を見てもら

うことで、良いことも疑問に思ったこともすべて自らの将来の働きに生かしてもらいたいと願っています。また受け入れた神学生のことは、彼らが卒業してからも子どもを送り出した親のような気持ちで見守り続けています。神学生時代は、大丈夫だろうかと心配させられることも少なくはないのですが、卒業後に労苦しながらも主の業に仕えていることを知らされると、不信仰な取り越し苦労であったことを反省させられ、感謝に満たされます。また神学生を画一的に見てしまう傾向がある私たちですが、神さまは実に多様な人材を用いられるお方であることも学ばされます。

私たちは、これからも主が必要とされるならば神学生の奉仕教会として仕えさせて頂きたいと願っていますが、さらに自らも多くの働き人を産み出す教会となることを祈っています。

訓練の場として

清岡 卓生

Takao Kiyooka

東大宮福音自由教会 牧師

東大宮福音自由教会では、この数年、宣教会の神学生をお預かりしてまいりました。神学生を預かりながら、教会としてどれほどの働きができたかと考えさせられております。

さて、教会として神学生をお預かりする時には、二つの面があるように思います。一つは、教会の必要があり、奉仕者として来ていただき、教会学校などの奉仕をお願いするということがあります。もう一つは、教会での奉仕者としての必要性と言うことではなく、主の働き人となる神学生を育てるための訓練として預かるということもあります。いずれであるかは、あるいはその比率はどうであるかは、教会の状況等により異なることかと思いますが、いずれであっても、教会は神学生を訓練のために受け入れています。

ですから、神学生を受け入れた教会としては、

その奉仕内容等は様々であっても、単なる便利な奉仕者としてではなく、あくまでも神に召され、主の働き人となる神学生を訓練のためにお預かりしたものである事を心しく思います。けれど、そのように考える時、では私たちの教会では神学生のための特別な訓練プログラムなどを設けているのかとなります。残念ながら、私たちの教会でもそのようなものを設けていないのが現状です。しかし、神学生を訓練のために受け入れる教会としては、やはり、預かった教会としての責任を感じるものであり、宣教会と連携しつつ、訓練の場としての教会での基本的な訓練プログラムを考える必要があろうと感じているこの頃です。

伊藤 暢人

Nobuhito Ito

聖書神学舎 教務主任

今夏は特別な機会をいただいて、7月と8月の約2ヶ月間アメリカに短期留学することを許されました。47歳にして初めての(短期ながら)海外留学! 英語に苦労しながらも、胸躍る日々でした。あらためて、奨学金をいただいたことと、また、送り出してくださった湘南ライフタウンキリスト教会の兄姉と聖書神学舎の皆さんに、家族に感謝します。

私が向かったのはボストン郊外にある Gordon-Conwell Theological Seminary でした。前半の3週間は自分のペースで図書館や空きスペース、ベンチで自習しました。今回私は詩篇(詩文)の学びに集中することにしていたので、その関連の研究書、注解書などを読み続けました。特に、Adele Berlinの“The Dynamics of Biblical Parallelism”は以前から読みたかった本でした。これは詩文の特徴である並行法を言語学的に研究したもので、並行する二行を(1)文法的な側面、(2)語彙および意味的な側面、(3)音韻的な側面など様々な角度から分析していきます。お勧めです。

7月下旬からは授業が始まりました。私が取ったのはサマーコースの一つである“Old Testament Poetical Books”(担当 Dr. J. Niehaus)という詩文書研究のクラスでした。並行法の特徴やその研究の歴史を概観し、またこれも詩文の特徴である比喩表現について学び、その後まず詩篇以前の詩文(創世記1:27, 2:23, 出エジプト記15章の海の歌など)について考えていきます。次に、詩篇

研究のイントロダクションとしてグンケル、モーヴィンケル学派などを学び、その後は様々な詩篇や預言について分類ごとに取り上げていきます。たとえば、賛美の詩篇—29篇(その解釈の歴史は興味深いものでした)、メシア詩篇—110篇、共同体の嘆き—哀歌5章、契約違反に対する訴え Covenant Law-suit—イザヤ1:1-21といった具合です。また、リーディングで課される文献の量が多く、文字通り朝から晩まで机に向かわないと読み終わりません。幸い(?)、神学校の周囲には何もなく、私も車がなかったので誰かの助けなしには遊ぶこともできず、読書に集中する毎日でした。その甲斐あって、必須とされていた条件(約1,200ページ)を上回る約1,500ページを留学期間中に読むことができました。途中3回のテストを含め、充実した学びの時でした。

紙面の都合で通っていた二つの教会のことを書き記すことはできませんが、久しぶりに説教を聞く恵み、特に毎週続けて聞ける恵みにあずかり、感謝でした。日常の奉仕をわきに置いて、関心のある学びと、そして祈りに専念することのできた貴重な2か月間でした。

名前が、時代の変遷とともに変化していくのは、現代だけでなく、古代においても同様である。明治時代に「三郎」「佐助」「〇〇之助」等があり、さらに江戸時代に遡れば「〇〇左右衛門」や「〇兵衛」が現れる。最近では、特に女の赤ちゃんの名前が著しく変化しているように思われる。「幸子」「芳子」「康子」のような伝統的な名前はすたれ、「ひな」「ゆい」「あかり」等の、意味よりはむしろ語感を優先する傾向がある。従って、そのような名前の変化は時代を反映しているので、その変化が固定化されていれば、逆に名前からその年代を突き止めることも可能となるのである。従って人名を同定することが文書の年代決定を左右することにもなる。

そこでエジプトの人名を一つ紹介したい。それは、ヨセフがファラオから授けられた「ツァフェナテ・パネアハ」(創世記41章45節)という名前である。セム人がエジプトに移住したとき、新たにエジプトの人名を採用したことは、他の文書からもよく知られている。このヨセフのエジプト人名が、エジプトでどのような名前であったのかは、古くから議論され、私の知る限りでも、12通り以上の説明が提案されてきた。なかでも19世紀末にシュタインドルフが最初に提案して以来、「ジェ・パネテ・フアンフ(神は言った「彼が生きるように」)」という解釈が広く受け入れられている(例えば『新聖書辞典』いのちのことば社、828頁)。この名前の解釈は確かに不可能ではないし、音の対応においても(カタカナ表記では十分説明でき

ないが)無理がない。ただこの解釈の難点は、ヨセフの時代よりはるか後の時代にしか出てこない名前のタイプであることである。それゆえに、ヨセフ物語をずっと後代に位置づける根拠としても用いられてきた。

そこで、私の恩師であるK.A.キッチン先生は、13番目として「ジェ・ネパ・イブ・アンフ(ヨセフはイブアンフと呼ばれた)」を提案している(New Bible Dictionary, Tyndale, 1272頁)。これはエジプトの中王国時代に出てくる名前なのでヨセフの時代にも合致する。唯問題は、一つのメタセシス(stnp>spnt)を想定しなければならないことである。そこで、私は、第14番目として「ジェファ・ネテ・パアンフ(私の備えは神、生けるお方)」というエジプト人名を提案している。これは、音の対応においても完全に一致しているし、年代も後代に属するので、ヨセフの時代にも使われた名前である。ただし、これまで紹介してきた名前は、私のものも含めて、どれもそのまま文証されていない。それなのにこのような議論が可能なのは、エジプト人名のタイプの変遷が明白なので、それに基づいて再構成されうるからである。それはエジプトの人名が詳細に研究されて初めて言えることでもある。なおエジプトの人名辞典は1935年H. Rankeによって出版された(Die Ägyptischen Personennamen)。そこには何と1万8千以上のエジプト人名が蒐集されている。その資料によってこのような議論が可能とされてきたのである。

○ 図書館から

津村 俊夫

Toshio Tsumura

聖書宣教会 研究図書主任・図書館長

神学校の図書館は、資金の余裕があれば買いたいという考えでいる限りは良い本が揃いません。図書予算はその学校のバロメータであると言われますが、現代のように新しい本が次から次へと出版される時代に、購入すべき本を選ぶのに一苦労です。図書館の業務で大変なことは、本の分類です。言わば、受け入れた本の本籍と現住所を登録するのですが、神学教育の広がりや深さを、そしてその全体像を、頭に入れておかないと間違いを犯すことがあります。

例えば、新約学者が、安息日についての本を信徒向けに書いた場合、それは新約学の分野か、教会教育の分野か、組織神学の分野か、礼拝学の分野か、どこに分類すべきかしばしば迷います。旧約学者が現代の宣教の課題について英語で書いた本は、旧約神学の分野か、宣教学の分野か、現代神学の課題か、英語圏の教会の直面している諸問題を扱っているのかによって分類が異なります。

私がアメリカの神学校で学んでいたとき、もう半世紀にもなりますが、神学校の図書館の館長は、図書館学と神学の両方の分野で学位を持っている人が望ましいと言われていました。また、少し大手の出版社には、神学や聖書学の分野で博士号をもっている人たちが何人もいて、編集に従事しています。私のサムエル記の注解書担当の編集者は、学会で研究発表をしている学者でもあります。我が国の神学校やキリスト教関係の出版社には、まだまだ人材が足りないということでしょう。これで良いということではないでしょう。日本の教会の祈りの課題の大切な一つではないでしょうか。

○ 近況と祈りの課題

- ☐ 研修生一同、主に支えられています。学年ごとに特長も成長の課題も多様ですが、恵みはいつも豊かです。7月と10月と結婚が続き、2名が男子寮から家族寮に移りました。
- ☐ 家族寮では10組、11名が、幸いな交わりを形成しています。0歳から小学1年生までの7人の子どものためにもお祈りください。
- ☐ 卒業予定者5名が、主が良しと認めてくださる学びと訓練を全うして、主が備えておられる働きの場に遣わされて行けますように。
- ☐ 教職員の霊肉の健康のためにおとりなしてください。また、教師陣の世代交替の備えのために、さらに専任教師が加えられるようにお祈りください。
- ☐ 男子寮の風呂から一階天井裏に漏水がありましたが、ようやく改修工事が出来ました。築28年となった校舎には、営繕の必要が増して行きます。賢明な対応ができるようにお祈りください。
- ☐ 日本でも、世界でも、福音伝道のために献身する者が多数起こされますように。
- ☐ 為政者のために祈ります。主がこの国をあわれんでくださいますように。